

3 年間基本計画

(1) 昨年度までの研究の成果と課題

昨年度は、研修会主題「学んだことを社会や生活に生かす学習過程のあり方」とし、次のように研修会主題に迫る2つの視点と研修会を通して吟味してきた点を設定して、研究を進めてきた。

●研修会主題：「学んだことを社会や生活に生かす学習過程のあり方」

●研修会主題に迫るための視点

視点①：子どもの予想と見通しから創り上げる学習計画をもとにした単元づくり

- ・「単元を見通す学習問題」の解決に向けて、子どもの予想や見通しをもとに学習計画を立てたことが、その後の子どもの学習過程にどう生かされているのか。
- ・子どもが、何を（学習内容）どのように（学習方法）学んだかを自覚するためには、どのようにふり返りを行うとよいか。→「社会や生活に生かそうとする姿」につなげる。

視点②：本気の学習問題を追究し、社会的事象の意味に迫る授業づくり

- ・本気の学習問題の成立過程（成立過程を丁寧に追うことで、本気の学習問題を子どもたちがどのように捉えているのかを明確にする）
- ・子どものみとりにもとづいた、社会的事象の意味に迫るための手だて（資料の精選、資料提示のタイミング、板書、問い返し、発問など）は適切なものか。
- ・1時間の授業の中で概念的知識を獲得しようとしている姿とは、どのような子どもの言葉で表現されているのか。

成 果

【視点①】

- 学習指導要領の目標を分析したことで、目標に迫った単元を構想していた。
- 既習事項や生活体験といった子どもの実態を生かして、子どもが予想や問いをもてるような導入を工夫したことで、単元を見通す学習問題や学習計画をつくり、高い意欲で追究していた。
- 子どもと学習計画を立てたことで、子どもは問題解決に向けて何をどのように調べたらよいかの見通しがもて、主体的に学んでいた。
- 単元を見通す学習問題へのふり返りを意図的に行うことで、子どもが「何を学んだか」を見つめ直す機会となり、次につながる学びを生み出す姿が見られた。

【視点②】

- 子どもが主体的に追究できる本気の学習問題は、社会的事象との認識のずれや、前時までの学習が複合的になって生み出されるものであった。その成立過程を丁寧に追うことで、本気の学習問題を子どもがどのように捉えられているのか明確になっていった。
- 学年の実態に応じて、本気の学習問題を追究していく手だて（身近な材、板書、資料など）があったことで、子どもが社会的事象の意味等に迫るものとなっていた。
- 子どもが自分の学びを自覚する上で、ふり返りが大切であることが共有できていた。

課 題

【視点①】

- 子どもと立てた学習計画が、社会的な見方・考え方が働かせて追究できるものであるのかを更に吟味していくことで、単元目標に近づくことができると考える。
- 追究過程において、子どもの主体性に任せるだけではなく、教師の指導性（教師の出）を発揮させる場面（発問・問い返し・資料提示など）の精選が必要だと感じた。
- ふり返りを通して子どもが学んだことを自覚し、社会や生活に生かそうとする姿を明らかにすることができなかった。
- 単元の終末において、選択・判断している姿やよりよい社会を考えて学んだことを社会生活に生かそうとする姿は、まだ検討の余地がある。

【視点②】

- ふり返りに対する捉えが様々であった。子どもが自らの学びを自覚し、社会や生活に生かそうとしている姿へつながるようなふり返りのあり方について、次年度も追究していく余地がある。
- 前時の資料提示をきっかけに、まだ解決できていない本気の学習問題を生み出そうとしたが、子どもの思考に寄り添っていないことがあった。本気の学習問題が、社会的な事象の意味に迫る問題であり、子どもが本当に考えたい問題に高めていく必要があった。

(2) 今年度の研修会主題と主題に迫るための視点

●研修会主題：学んだことを社会や生活に生かす学習過程のあり方

●研修会主題に迫るための視点

視点① 子どもの予想と見通しを大切にした単元づくり

視点② 本気の学習問題を追究し、社会的事象の意味に迫る授業づくり

(3) 今年度の研修会主題とそのとらえ

市社研ではこれまで、子どもたちが社会的事象をじっくり見つめ、そこから生まれる問題意識をもとに、学習を展開することを大切にしてきた。その学習過程では、子どもたちが自ら調べたり、話し合ったりしながら、自分の考えを広めたり、深めたりし、社会的事象がもつ意味や特色をとらえていくことをねらってきた。このことは今後の研究においても継承し、大切にしていく。

さらに昨年度より、子どもが「**単元を見通す学習問題**」をもとに予想した子どもの問題意識が学習計画につながっているのか、教師主導になってはいないか、また「**本気の学習問題**」を追究する際に、子どもが何を調べ、何を考え、どのような言葉や文章で表現していくのかを教師がとらえ、そこに迫るためにはどのような手だてが必要なのか研究を深めてきた。

子どもたちが主体的に学習に向かい、調べたり話し合ったりしながら追究する問題解決的な学習を積み重ね、未来に生かそうとする意欲をもつ授業を創っていくため、引き続き、研修会主題を、「**学んだことを社会や生活に生かす学習過程のあり方**」と設定する。

「**学んだこと**」とは、これまで市社研が大切にしてきたように、子どもたちがもつ問題意識を中心として社会的な見方・考え方を働かせて追究していくその過程において育成される公民としての資質・能力の基礎を指す。具体的には、「社会生活の理解に関する知識及び社会的事象について調べまとめる技能」「社会的事象の特色や意味などを多角的に考える力、社会への関わり方を選択・判断する力、考えたことや選択・判断したことを説明したり、議論したりする力」「よりよい社会を考え主体的に問題解決しようとする態度」、そしてそれらが培われる過程で子どもが身に付けた学習方法である。

「**社会や生活に生かす**」とは、学習の中で育成される資質・能力を生かして、「～を調べると～がわかった。だから次の学習でも同じように調べてよう。」と学習方法を新たな学習へとつなげたり、「〇〇の学習では～だったから、もしかしたら△△でも～かな。」と獲得した概念的知識を次の学習でも活用できないかと考えてみたり、自分の身の回りの出来事につながることはないかと自分たちの生活のあり方やこれからの社会の発展などについて考えたりするなど、次の学習や自分たちの生活へとつなげようとするということととらえる。

「**学習過程のあり方**」とは、子どもたちが主体的に学び、自分の考えを深め、学んだことを今後の学習に生かしていく学習の流れを指している。

まず、成立過程において、生活経験・既習事項など子どもの実態を踏まえて導入を工夫し、それらと異なる事実と出合うことで生じる子どもの意外性を導き出し、追究意欲が高まったところから生まれた子どもの問題意識を大切に「**単元を見通す学習問題**」がつくられる。

そして、子どもがこれからの学習に見通しをもちながら主体的に学習計画を立てていく。さらにその過程で子どもが矛盾を感じる社会的事象に出合ったり、ある社会的事象に対して友達と意見が違ったりして子どもの思考が揺さぶられることで疑問が深まり、「**本気の学習問題**」が成立し、その追究過程で社会的事象の意味等に迫っていく。

また、必然性が高まったときに学習過程をふり返ることで自らの学習を調整する場面、単元の終末としての、学びを社会生活に活かしたり、選択・判断したりする場面である。

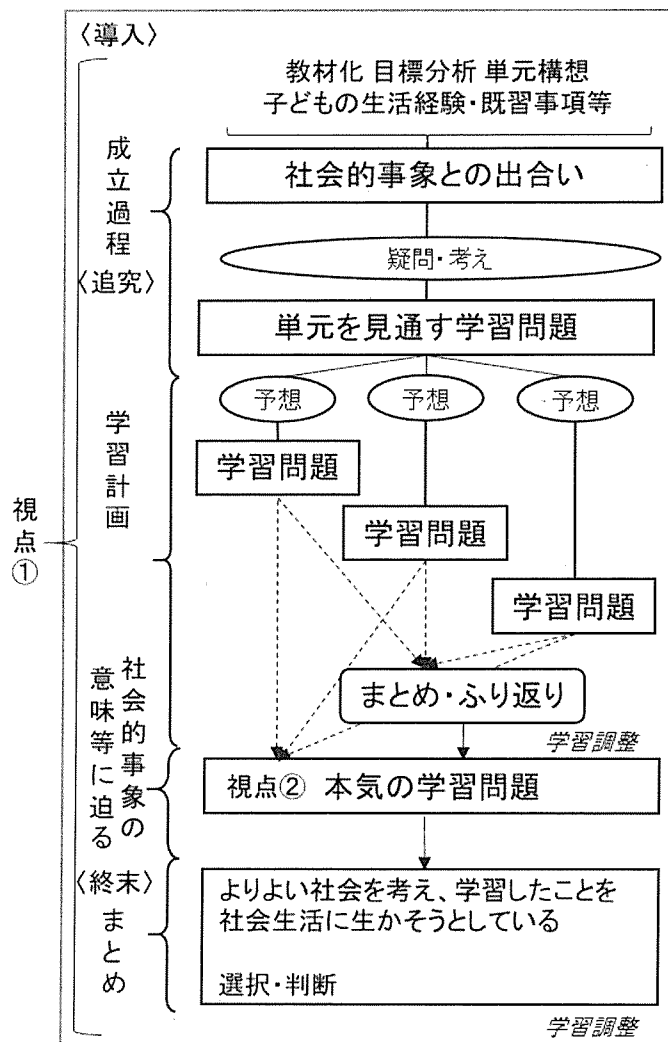
以上の研修会主題のとらえから、どんな社会的事象をどのように出合わせるのか、どの視点に目を向けさせるか、どこで立ち止まりどこで子どもの考えを広げ、深めていくかなど、市社研で大切にしてきた問題解決的な学習を継承し、子どもの学びを深めるために、2つの視点を設けて研究していく。

(4) 研修会主題に迫るための視点

視点① 子どもの予想と見通しを大切にした単元づくり

視点①では「単元の導入から、単元を見通す学習問題の設定、本気の学習問題、そして単元の終末」の過程における、子どもの問題意識、思考の流れを大切に「単元づくり」の視点で研究を進める。

- ・子どもの問題意識をもとにした、子どもが数時間先まで見通すことのできる「単元を見通す学習問題」はどのように成立していくのか。
- ・「単元を見通す学習問題」の解決に向けた学習計画を立てる際に、社会的事象の見方・考え方を働かせて追究していく場面をどのように設定していくか。(指導者側で、ある程度、単元を見通す学習問題や本気の学習問題を見通しておく)
- ・単元の途中や終末において、どのような振り返りを行うことで、子どもは学んだことを整理して次の学びを考えたり成長を感じたりすることができるのか。
- ・単元の終末での、それまでに学んだことを生かした、自分たちのかかわり方等の選択・判断とはどのような場面か。
- ・単元の終末で、内容に応じてよりよい社会を考え、学習したことを社会生活に生かそうとする子どもを育むにはどのような単元構成が有効か。



視点② 本気の学習問題を追究し、社会的事象の意味に迫る授業づくり

視点②は学習計画の追究過程で、矛盾を感じたり、意見の相違が生まれたりする社会的事象に出会う場面を設定し、その社会的事象の意味に迫る「本気の学習問題」が生まれるまでの過程とその問題を追究する授業場面の視点で研究を進める。

- ・前時までの学習の中で、指導者の意図的な資料提示や発問を通じて、子どもが切実感をもって取り組める「本気の学習問題」は、どのように成立していくのか。
- ・振り返りや発言などをもとにした、子どもにとっても指導者にとっても必要感のある資料の選定や提示のタイミング、教師の問い返しや子どもの発言や表現に対する価値づけ等。また、それらを生かす効果的な「教師の出」について。
- ・社会的事象について学び合う中で、自分の考えを表現していくことを通して、どのような概念が形成されていくのか。

(5) 研究・研修活動

- ① 毎月1回定例研修会を行う。(内容は学年別研修会や講演会等)
- ② 研究内容と活動の方向性については、研究推進部や支部長会、幹事会で検討し、研究内容の具現化を図る。
- ③ 幹事による研修を充実し、幹事としての力量を高め、本部・支部の研修内容を高める。
- ④ 研究発表大会、支部長会、幹事研修会、神奈川県小学校教育研究会社会科部会・学年別研修会等を通して、研究の交流、情報交換の場を充実し、研究の活性化を図る。
- ⑤ 研究主題に関する考え方の深化発展を目指し、各種講演会を開催し実践に役立つようにする。

(6) 研究組織及び活動

会の運営のために、次に示す部会を設置したり、活動を行ったりする。

① 学年別研修会

3年、4年、5年、6年の4部会を設置する。全ての会員で構成し、部長・副部長をおく。授業実践を通して、研究主題・研究内容等についての事例研究並びに理論的研究を進める。

② 支部長会

各支部の支部長及び役員で構成する。研究計画、諸行事、研修会の運営が円滑にできるよう調整を図るとともに、本部と支部、及び支部相互の交流と調整を進める。

③ 幹事会・幹事研修会

市幹事全員と役員で構成する。研究計画の審議や決定を行うとともに、幹事の力量を高める研修を行う。また本市研究会の推進役としての自覚をもって、研究活動の系統立った発展に努める。

④ 研究推進部

研究推進部長、副部長、学年別研修会の部長・副部長及び役員で構成する。研究活動の推進調整、並びに理論構築を図る。研究の成果や課題を明確にし、系統立てた研究発展に資する。

また、定例の研修会、研究発表大会、神奈川県小学校教育研究会社会科部会主催の学年別研修会に向け、会員が積極的及び、充実した実践提案ができるように支援するとともに、会員相互の交流を通して、社会科研究の深化を図ることができるよう努める。

⑤ 学年運営部

学年運営部長、学年別の部長・副部長、市幹事及び役員で構成する。学年別研修会の円滑な運営と研修会の充実を担う。研修会の司会・記録を担当し、研修会の運営をする。また、アンケートを作成、集約し、研修会の振り返りに生かすとともに、研修会の内容を「研修会記録」にまとめ、会員に発信し、周知する。また各実践提案をまとめた冊子「研究のまとめ」を作成し、販売する。

⑥ 情報部

市幹事と役員で構成する。研究主題に基づく研修活動から活動方針・内容に関する理論的示唆を受け、実践研究の充実のために役立つ情報を広く提供していく。「講演会」「研究発表大会」のプロジェクトを構成し、部長・プロジェクトリーダーが中心となり、担当役員と相談しながら、主体的かつ創造的な活動を行うよう努める。また、会報を発行し、社会科教育に関する情報や研究の成果・内容などを会員および各学校に広める。

⑦ 社会科授業づくり部

市幹事及び会員、また会員以外の教員で構成する。社会科研究に新たな志をもって臨み、互いの実践について話し合ったり、これまでの優れた実践記録を読み合ったりすることを通して、授業実践力を高めるとともに、交流を図ることができるようになる。

⑧ 研究発表大会

研究発表大会は、市社研の研究主題や研究内容をうけた個人テーマを設定した上で実践に取り組み、その実践をもとに市社研の研究を検証し、会員に対して広く発表する場である。

発表者は発表担当区の代表者であるが、実践については、区をあげて取り組むこととする。

⑨ 特別委員会「学習評価研究部会」

横浜市内の各学校において、よりよい社会科授業が展開されることを目指し、昨年度発行した社会科指導計画事例集を活用して、学習過程や具体的な授業場面を通して、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の視点で子どもの学びを分析し検証することで、さらなる指導の改善や学習意欲の向上に生かす。またその成果を発信する。

⑩ 役員会

横浜市小学校社会科研究会の研究活動全体を総括し、各会・部の調整を図る。

(7) 研究の進め方

① 学年部

- ア 学年部では学年部長を中心に、研修会主題の研究をしていくために、研修会主題に迫るための視点をもとに、各学年の特性をふまえた学年で大切にしたい手だてを示す。
- イ 研修会で研修会主題に迫るための視点をういた授業実践を提案してもらい討議することによって研修会主題についての研究を進める。
- ウ 授業提案の1回目の事前研に関しては、部長・副部長を中心に、該当単元の実践例や各学校の指導計画例を持ち寄り、参考資料とする。
- エ 学年部の運営は学年運営部と連携して行う。

② 推進部

- ア 推進部は推進部長を中心として研修会主題に迫るための視点をもとに研修会を通して吟味することを設定する。
- イ 各学年部会の設定する「学年で大切にしたい手だて」を整合性のあるものにする。

③ 学年運営部

- ア 学年別研修会の司会や記録、研修会の振り返りアンケートの作成と集約、速報の発行を担当し、研修会を円滑に運営する。
- イ 学年別研修会の運営について、学年部と連携して行う。
- ウ 研修会の内容を知らせるために、「研修会記録」にまとめ、ホームページにも掲載することで、いつでも誰が見ることができるようにしておく。掲載内容は提案の概要、討議内容、講師の先生の指導内容を中心とする。
- エ 年間の実践を紹介する冊子を作成する。

④ 実践者

- ア 実践提案・授業提案には会員の方々が中心となってあたる。
- イ 授業実践、実践提案者は、研修会主題に迫るための視点をもとに手だてを考え、提案の際に位置付けるようにする。
- ウ 実践提案については次のことに留意する。
 - ・ 子どもの姿が分かるよう、提案の仕方を工夫する。
 - ・ 1時間の授業記録、単元における子どもの考え方の変化等を掲載し、具体的な子どもの姿が分かるようにする。
 - ・ 個人情報に関しては十分配慮をする。
- エ 県小社の提案に関しても各部会での実践提案と同様の扱いとする。
- オ 研修会活動には、先輩の先生方を講師として招聘し、指導を仰ぐようにする。

⑤ 配慮事項

- ア 研修会での話合いは、具体的な事例をもとに進める。各学年部で設定した手だてをもとに、研修会主題に沿った話合いができるようにする。
- イ 地域的な偏りはなるべく避けるように授業者を決定する。また、部会だけでなく各支部においても運営、内容面で十分な協力体制がとれるようにする。(実践提案も同様とする)

(8) 会員及び会費

- ① 本市小学校教員を対象として年度始めに支部を通して募集する。
- ② 年間1500円とし、年度始めに支部を通して納入する。